

平成二十八年九月十五日（木）

十九世紀後半より二十世紀にかけ科學技術大いに發展し、その基本概念たる「普遍性」こそ人類の目指すべき指針とはなりにけれ。されどソ聯を中心とする共產主義、米歐を中心とするグローバルイズム等が普遍主義の頂點を目指すも孰れも失敗に終る。一方前世紀の末葉、地球環境問題漸く顯れ、特に生物種の絶滅を憂慮し、「種の多様性」叫ばるゝに及び、「多様性の尊重」は今世紀最大の世界的命題となる。思ふに我が國文化發展の歴史に鑑みるに、往古には唐土の文化を學ぶにも、彼は易姓革命、我は萬世一系と互ひの多様性を認めつゝ吸収するを常とせるも、明治の開國は當にこの普遍主義の開花せる時期にして、我が國文化が必ずしも「普遍的」に非ざる現實を前に、國の獨立保全のために己むを得ず西歐普遍主義をそのまゝ嚙下す。日清、日露の戦役を経て、この方針は成功するかに見ゆるも、次第に日本の多様性との葛藤生じ、遂には東亞新秩序を唱ふるも戦ひに敗る。

この敗戦への反省は惜しむらく、ペルリ來航以來の百年を對象とすべきを、直近數年の軍國主義にのみ焦點を當て、普遍主義に對する根本的考察無きまゝ、戦後憲法には「人類普遍の原理」と明言し、教育基本法は「普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造」を謳ふ實に六十年を閲す。平成十八年法の改正により漸く普遍主義の呪縛を脱するも、今日グローバル化と名を變へ、小學校の英語必修など、戦前より寧ろ強調の度合を増し、そこに活を求めむとするも、前途甚だ不透明なり。

普遍主義は本來自然科學にのみ有効にして、文化の面には寧ろ弊害を伴ひ、特に「言語の絶滅」はその著例なり。今日世界には六千乃至七千の言語あり、その半數は話者一萬人以下にて、その大半は今世紀末に消滅すと云々。これらは長きに亙り世代間に繼承せられ來るも、グローバル化の下にては、この母國語を學ぶより英語、中國語など世界的に流通する言語を學ばざるを得ず、若き指導者世代、母國語の傳承に注力の餘裕なく、祖宗の戒め失ひたる社會、普遍主義下に暴動、内戦に苦しむを悲しむ。

日本語はその心配なしとする人多きも、戦後の「漢字文化圏」消滅に思ひを致す人寡し。元來漢字は時代、地方により發音は異なるも、字形共通なるゆゑ相互の理解容易となり、漢土を中心に、韓、越及び日本を含む廣大なる圏域に於ける文化交流の實を擧ぐ。然るを戦後、中國は自國民の識字率向上のため簡體字を制定し、韓國はハングルを以て漢字に代へ、日本は國語のローマ字化を念頭に漢字制限と字形變更を行ひ、かくて圏内共通の文字消滅す。特に科學技術用語は明治の先人漢字熟語に創作し、その通用圏内に廣く及ぶも、制限漢字への移行と稱する術語の大幅改訂により、その共通性も亦消滅す。これらは一見多様性の弊害の如きも、底に普遍主義的言語觀を見る。この趨勢に獨り臺灣は從前の漢字を保持し、選舉による元首（總統）、獨自の領土、徴稅、司法の權能を有し、對岸の巨大國家に對しても堂々の國家運營を行ふ。これ當に多様性の世紀に相應しく、我が國語もその文學と科學論文にて世界の公用語たるを目指すべきなり。

（平成二十八年九月二十六日受附）